

本日の学び：「一緒に主の食卓へ」 テキスト：第一コリント11章17-26節（参照:11章27-34節）

【理解の手がかりとして】

当時のコリント教会において起こっていた大きな問題は「仲間割れ」(11:18)であった。パウロは「あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いている」(11:17)と言う。「集まり」とは本来は神の招きによって呼び集められたエクレスシア（教会）であるべきである。しかしそれが単に気の合う仲間同士の会合になっていたとすれば、その集まりの質が問われるべきである。

パウロは、その分派争いの動機である「適格者」（リーダー）探しを必ずしも全否定しない。人の集まりである以上リーダーは必要であるし、そのための論議をパウロは排除しない。

しかしながらパウロは、教会の一致を確認する「主の晩餐」という場面に起こっている出来事を決して看過できなかった。主の晩餐ではパンと杯を分かち合い共に食する。しかし、コリント教会では、他の人を待つことなくパンを食べ、杯（ブドウ酒）を飲み干してしまう者もあり、またブドウ酒を飲み過ぎて酔ってしまう者もいたのである。※コリント教会での主の晩餐は、一つの流れの中に二つの目的があったと考えられる。まず信徒の手による持ち寄りの食事（愛の食事、愛餐）があり、次に聖餐（感謝の食事、聖体拝領）で終わった。

ここで「貧しい人々」(11:22)が恥をかくとは、彼らは奴隷的身分の人であったため、労働時間が長く、その愛餐（主の晩餐）に遅れてしか参加できなかったのではないかと推測される。急いで駆け付けた時には、既にパンもブドウ酒も無くなっている、ということ。また、持ち寄りの食事が分かち合われず、持参したものを自らが飲み食い尽くしてしまう、という事態でもあったのではないかと。

なんと嘆かわしい事か。パウロがこれに続けて「キリストの体」(12:27)や「愛」(13章)「集会の秩序」(14:26-)を語らずにはいられなかったはずである。私たちはこのコリント教会の姿を正しく反面教師的に学ばねばならない。

23～26節は毎月の主の晩餐時に読む制定の言葉である。この一段落の言葉とその意味については言うまでもないことであると思うので、詳しい解説は割愛する。

27節に「ふさわしくないままで」とある。この「ふさわしくないまま」とはどういう意味だろうか。主の晩餐に与るのに「ふさわしい者」「ふさわしくない者」という区別（基準）があるのだろうか。

もし、この「ふさわしさ」を、私たち人間一般の罪の問題とし、その罪の軽重で主の晩餐への参与の是非が問われるならば、そこでは主の晩餐自体の本末が転倒する。主の晩餐とは、主の十字架の死（罪の贖いの御業）を指し示す儀である。そこには区別なくどんな罪びとも招かれているはずである。

この箇所を理解するとき、やはり当時のコリント教会の状況を見無視しては理解できない。この場面においてパウロが言う「ふさわしくないまま」とは、愛なき我欲のために主の晩餐の交わりを破壊しているコリント教会の人々の状態を言っている。富んでいる者たちが貧しい者たちへの配慮を怠り、自らの満足に終始し、分かち合う愛餐も残されていなかったのである。

主の晩餐とは「私のため」に留まらず「私たちのため（共同体のため）」のものである。一つのパンと一杯の杯に「共に」与り、そして「キリストによるひとつの体」であることを確認する機会である。しかしコリント教会の主の晩餐は、その「ひとつの体」どころか、ばらば

らだったのである。

そして驚くことに「弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだ」（30節）と言うのだから、その状況がいかに深刻であったか分かる。

主の晩餐とは、私たちの信仰、しかも教会（キリストの体）としての真実な姿が映し出される場である。その食卓を、他者の必要に思いを至らせることなくただ自己満足の場とするならば、主は私たちを「ふさわしくない者」として「懲らしめ」（32節）られる。

出エジプト後の荒野の旅路においても、イスラエルの民の信仰が試されたのは飲食においてであった。天からのマナを独り占めすることは許されず、欲張って集めすぎたものは「虫が付いて臭く」（出16:20）なった。この歴史の教訓は、「それぞれに必要な分」（同16:21）に与るということであった。

その苦難の旅路とその中でこそ気づかされた主の護りへの感謝を記念する過越し祭とその食事に、主の晩餐の原型がある。神の恵みは分かち合うべきものであることを、最初期の教会はその「愛餐（主の晩餐の流れの中で分かち合われる食事）」を通して証したのだろう。パウロがコリントの教会に望むのは、その原点への立ち戻りである。

さて、「コリント教会は・・・」と彼岸に立って批判するのはたやすい。しかし、このような事象は決して他人事ではない。そうならない為にも、常日頃からこのような御言葉を肝に銘じておかねばならない。パウロはコリント教会を全否定はしない。褒めるべきは褒め、批判すべきは批判する。私たちも、御言葉に基づいて自分たちの「長所」と「短所」を見極める訓練を日々努めていくべきであろう。

私たちは教会に集い、礼拝に与る時、また主の晩餐に与る時、隣の人のこと（必要）に思いを至らせているだろうか。教会の伝道力は、知識が第一ではない。その共同体の愛の実践である。弟子訓練とは、まず何よりもそれぞれの内に＜愛＞を形成することであろう。

『聖書教育』より

- 「イエスさまが、私たちのために十字架にかけられたこと、十字架において肉を裂かれたこと、そのことによって、私たちに神さまの愛が示され、わたしたちの罪が贖われたのです。」（聖書の学び～主の晩餐）
- 「『主の晩餐式の時は、できるかぎり教会に行く』と聞いたことがあります。主の晩餐に与ることを大切にしておられるのでしょうか。」（大人クラス）